

川内原発再稼働と火山問題に関する「かごしま反原連」の基本見解

1 構造的問題： 日本列島全体を観て、まず第一に重要なのは、「プレートテクトニクス理論」に基づく、①中央構造線、②フォッサマグナ、③糸魚川—静岡構造線の構造的関係である。

③により東日本と西日本に分断されており、その広大な分断地帯は下図で判るようにユーラシアプレートと隣接する二つのプレートが重なり合っている。更に西日本は、①により北西日本と南西日本とに分断されている。日本列島はプレートとプレートが押し合って海中から浮いて来た「瓦礫」が重なり合っただけでできたクズ岩盤の集合体なのだということが、最重要の「地震・火山問題の要」である。

下図で①と③が交わる位置の横の三つの山の内、一番南が御嶽山（カルデラ）である。まさにこの分断ベルト付近で噴火や地震が起こっている。②の地帯には多くの断層が発見されている。「大崩」「青崩」と言った地名も多い。

2 始良カルデラについて： そしてカルデラ問題では①の西側に集中する九州の5カルデラの位置関係を重視する。②の地帯でプレートの激しい動きがあれば、必ずや九州のカルデラに影響を与えると推定できる。特に川内原発にとって一番の脅威は始良カルデラである。大噴火が2万年位前、3万年位前とする結構信憑性の薄い学説があるが、重要な事は「大爆発の可能性はある」ということだ。何万年に1回だろうが、明日にでも活動を再開するかもしれないことを、何びとも否定できない。九電のカルデラモニタリングは自力でデータを採取したものではなく、大学関係者や気象庁などの政府機関の力に依拠しており、且つ、きわめて恣意的である。再稼働を前提にして数値やデータを、自社に都合良く操作しているに過ぎない。

3 桜島噴火の危険性について： 桜島の大噴火（大正噴火）があったから危険だという説（＝「噂」）があるが、この大正噴火がどんな規模であったかの事実をつかむ事が重要である。噴火による溶岩流は桜島の東側に（大隅半島）に大量に流れ出たのであり、西側の薩摩半島には大した被害の事実はない。しかも、桜島は北岳と南岳に大きく分かれる。現在活動しているのは、東側にあたる南岳の横っ腹の昭和火口であるという事実を無視してはいけない。溶岩流が流れ出る噴火が起こった際は東側の被害が想定できる。

桜島の火山灰が送電線に積もる危険があるとか、原発のフィルターに詰まって事故の原因になるとか心配している人々がいる。しかし、火山灰が電線に積もったのを見た事がある人がこの鹿児島県に居るのだろうか。次は私が以前から主張している説である。あのサラサラした灰に水分を混ぜて泥だんごのような物を作る人間がいたら教えてもらいたい。「いや積もる」というのであれば、実際に証明してほしいものである。原発のフィルターに灰が詰まる危険性については、車の空気吸入ダクトにフィルターが付いているが、これに灰が詰まって動かなくなったという話は聞いた事がない。エアコンのフィルターも然りである。私の自宅のエアコンのプロペラも灰まみれだが動かなくなったことはない。鹿児島には精密機械工場も沢山あるが、その空気清浄のためのフィルターに灰が詰まって工場のラインが止まっ

たという話は聞いた事が無い。下図を観て桜島が始良カルデラの一部分であることを重視すべきである。現在の桜島の噴火は始良カルデラのマグマ溜まりからの流出→噴出である。いわば、始良カルデラの「安全弁」と言える。従って、桜島の噴火が停止したり火口が狭まってマグマの供給と噴出のバランスが崩れたときの恐怖を考えねばならない。

4 中央構造線の「伝導性」について：フォッサマグナに新たな力が加わり中央構造線により力を始良カルデラに伝えた時の危険性を第一に危惧しなくてはならない。その際は、川内原発至近の肥薩火山群、北薩火山群、そして薩摩半島を形成した類型的火山群の活動再開も危惧する必要が出てくるだろう。北薩火山群には蘭牟田池（火山＝カルデラ）が含まれ比較的新しいと言える。火山学者や九電の分析を参考に踏まえるならば、九州南西部の火山活動による褶曲や隆起は西から東へと移動していることになる。このことは、たしかに事実であろう。現在の九州南部の火山活動が桜島や霧島火山群に集中している事が、その証左であると推定できる。しかし、我々が脅威と感じるべき事は、①②③の連携によりそうした古い火山群に新たな力が加わり刺激され、噴火や地震が再開される可能性が出てくるという事だ。地層の新古に関わらず、深層で起こる活動の力がどのような影響を与えるか、われわれ人間が勝手に予測することはできないのである。

5 川内原発再稼働の無謀性：まさに、川内原発の周囲は自然の脅威に満ち溢れている。だからこそ、川内原発の再稼働は断じて行ってはならないのである。

